

**早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第 1 回ふくしま浜通り文化育成と発信事業ワーキンググループ会合
議事録**

日時：2019 年 6 月 14 日（金）18:00～20:00

場所：早稲田大学 19 号館 713 会議室

記録：朱 鈺、李 洸昊

プログラム

- 18:00-18:05 開会挨拶：松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
安部 良（安部良アトリエ一級建築士事務所、明治大学理工学部建築学科兼任講師）
- 18:05-18:45 住吉智恵（アートプロデューサー／Real Tokyo ディレクター）
「地域における芸術祭の役割と効果について」
- 18:45-18:50 休憩
- 18:50-19:55 総合討論
コーディネーター：安部 良
討論者：中嶋聖雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
佐々木龍郎（佐々木設計事務所代表）
藤城 光（アートプロジェクト PRAY+LIFE 代表）
森野晋次（アートプロジェクト気流部代表）
松岡俊二（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター研究院准教授）
- 19:55-20:00 閉会挨拶：松岡俊二

【開場挨拶】

松岡俊二

早稲田大学は 2017 年 5 月に福島県浜通り地域における研究拠点として「早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター」を設立した。2019 年 1 月 27 日に檜葉町で開催した第 3 回ふくしま学（楽）会では、それまでの様々な議論を総括し、長期的・広域的な観点から福島県浜通り地域の将来像を示すため、社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）を提案した。以下の 3 点は SI 構想の 3 本柱である。

- ①エネルギー産業遺産・原発事故遺産・震災復興施設のネットワーク
- ②IF やエネルギー遺産群を核とした、地域の新たな魅力を見出す地域アートの展開
- ③エネルギーと復興を学ぶ体験に農泊・渚泊など組み合わせた広域 DMO の創設

本日のワーキンググループ（WG）会合は、5 月 24 日に未来学園で開催したふくしま浜通り芸術祭準備・懇談会の成果を踏まえた SI 構想の第 2 柱の具体化へ向けた取り組みである。本 WG 会合では、芸術祭という形にこだわらず、浜通り地域における様々な文化芸術の展開の可能性を含めて議論していきたい。

安部 良

前回の芸術祭準備・懇談会では、今後、浜通り地域で事業を進めることにおいて、慎重に議論を進めていくことと地元の住民感情への配慮の必要性という2点が共通する意見であった。芸術祭については、社会では賛否両論があり、さらに芸術祭以外にもいろいろな形の地域おこしの活動が存在する。そのため、このような様々な可能性や多様性を包摂するため、今回のWG会合を「文化育成と発信」という名称で暫定的にしている。今後WG会合の回数を重ねるうちに、正式な名称を検討し続けていきたい。

しかし、これまで芸術祭がキーワードにされてきたため、本日のWG会合では芸術祭とは何か、地域にとって芸術祭がどのような役割を果たしてきたのかを勉強した上で、福島県浜通り地域における文化事業の可能性について議論を進めたい。

【報告】

住吉智恵

「地域における芸術祭の役割と効果について」

(1) 芸術祭の歴史

- ・現代の芸術祭の起源は1798年のパリ博覧会とされている。19世紀以降、万国博覧会が世界規模の、特に欧州を中心にした新たに見いだされた事物や創作物の展示場所となった。その中で、1895年にヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展が初めての現代美術の展覧会として始まった。現在ではヴェネチア・ビエンナーレは世界最大級の芸術祭となり、同時代の最先端のテーマのもと、最前線の現代アート作品が展示されている。また、主会場のアルセナーレとシャルディーニ以外の場所でも、多くの質の高い展覧会が同時進行されている。
- ・20世紀の中ごろから、世界各地で国際芸術展が行われるようになった。有名なのは、サンパウロ・ビエンナーレ、ドクメンタ、ミュースター彫刻プロジェクト、ハバナ・ビエンナーレなどがあげられる。現在はこれ以外にも、インスタブル・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ、上海ビエンナーレなど、世界の様々なところで国際芸術展が行われている。

(2) 日本における芸術祭の状況

- ・日本で初めての国際芸術展は東京ビエンナーレ（1952～1979年）である。展示作品は、現代美術に限定され、東京都美術館をはじめとし全国を巡回しながら開催された。しかし、1979年、運営上の赤字により中止となった。
- ・バブル経済崩壊後、2000年に新潟県の里山地域では越後妻有アート・トリエンナーレが開催された。主にプロジェクト型の作品が展示され、それが常設化されている。また、2001年から自治体と国際交流基金の支援のもとで、横浜市広域で3年に1回のヨコハマ・トリエンナーレが始まった。政治的・社会的テーマに関わる先鋭的なアーティストの作品も展示された。ただ、現在では支援資金が縮小したため、会場が横浜美術館に限定されるようになっている。

(3) 日本における芸術祭の分類

A. 都市型

【特徴】

- ・国際性：国際的視野で作品を選定
- ・テーマ性：社会と密接なテーマで開催
- ・多様性：主流とされているアーティストだけでなく、様々な立場の人を招く
- ・先鋭性：最先端のアーティストの作品を展示
- ・市場価値：資本力を持ったギャラリーや企業・個人スポンサーによる支援が必要
ギャラリーの支援からアーティストが高い市場価値のある作品を創作可能

【代表例】

- ・ヨコハマ・トリエンナーレ
- ・あいち・トリエンナーレ：オペラや音楽などパフォーミングアーツを重視、ディレクターが毎回アート以外の人から選定されることが特徴的である。
- ・岡山芸術交流：岡山市、岡山県および石川文化振興財団が主催した現代アートの国際展覧会は、コンセプチュアル・アートに絞り、世界一流のアーティストをアーティストックディレクターに招聘し、最先鋭的な作品をキュレーションして展示している。
- ・さいたま・トリエンナーレ（さいたま国際芸術祭）：一般大衆にも共感できるような作品が多い。2回目の開催では公募でディレクターを招いた。

B. 地域型

【特徴】

地域活性化、経済効果、人材育成、地産文化の開拓、被災地復興支援

【代表例】

- ・瀬戸内国際芸術祭：福武財団による支援の下で、毎年新たなインスタレーション作品や恒久作品が増えることで、開催地域がアートの聖地になりつつある。しかし、芸術祭独自の企画イベントのインパクトが弱く、芸術祭自身の脆弱性が懸念される。ただ、その中で、地元住民が自力で活性化している島キッチンというアート施設は、珍しい事例として注目されている。
- ・KENPOKU ART 茨城県北芸術祭：森美術館館長の南條史生氏がディレクターを務め、科学テクノロジーと美術という先鋭的なテーマで、茨城県北部6市町にわたる広域エリアにおいて行った国際芸術展であった。しかし、地元住民のモチベーションの維持困難、資金調達困難などの原因で、2016年に1回開催して中止になった。
- ・Reborn Art Festival：2018年に始まった宮城県牡鹿半島と石巻市街地を主な舞台としたアート、音楽、食が主な内容の芸術祭である。

C. 特化型

【特徴】

写真、映像、メディアアートなど表現形態やジャンルに特化した芸術祭。または、厳選された少数、あるいは単独のアーティストに特化した芸術祭のことをここでは指している。

【代表例】

- ・KYOTOGRAPHIE 京都国際写真展：京都市内の歴史的な建物や近現代建築などを舞台にして、毎年開催する。毎回高質な写真映像が展示され、アルル国際写真フェスティバルとも連携する。有力なスポンサー企業により協賛されている。
- ・恵比寿映像祭：2009年より東京都写真美術館と恵比寿・代官山エリアにて毎年開催される。
- ・文化庁メディア芸術祭：1997年より都内美術館など文化施設にて毎年開催され、全国各地で地方展も開催される。
- ・東京芸術祭：2016年より豊島区池袋エリアを中心に、舞台芸術を主として毎年開催される。
- ・BEPPU PROJECT：2009年に始まった大分県別府市を中心として行った芸術祭である。予算規模が縮小されたが、それに合わせて芸術祭のプログラムを工夫して充実している。世界で有名なアーティストから、地元のアーティストまで、様々な作家による優秀な作品が見られる。

D. ちゃぶ台返し型

【特徴】

芸術祭の主旨へのそもそも論に回帰、視点を転換、領域と文脈の拡張、ヒエラルキー解体、参加型な

どを模索し続ける芸術祭。

【代表例】

札幌国際芸術祭：2014年から北海道札幌市において、3年に1度開催する芸術祭である。第一回は坂本龍一氏、第二回は音楽家の大友良英氏がディレクターを担い、芸術祭の定義や市場価値優先の現代美術の限定に対する疑問など、そもそもの問題を念頭に、従来の現代美術家のアート作品から視野を拡大し、ミュージシャン、ダンサー、料理人、雑貨屋さんなど、多様な作家による多様なパフォーマンスやアーカイブ展示を行った。

(4) 芸術祭の役割と効果について

- ・現代美術には、本来、以下の力を持っていると考えられる：
 - －知識や経験知では「わからないもの」に出会う機会を与える
 - －未知の領域、多様な他者への想像力と寛容性を豊かに育む
 - －新しいアイディア、表現技術、仕組みに触れる場となる
 - －固定化した視点を転換し、思考するきっかけとなる
 - －硬直した感情を揺さぶり、精神を高揚する効果が期待される
 - －精神生活にハリを与え、情緒のバランスを調える
- ・芸術祭の存在意義は、以下の問いから考える必要がある：
 - －祭である必然性、芸術である必然性、イベントである必然性とは？
 - －誰が、何のために、どんな形で実施すべきなのか？
 - －同時代性に寄り添う、進路としてのテーマ性は重要か？
 - －地域にもたらす影響や効果をつかむ基準とは？
 - －機能性・即効性・経済効果を求めるべきか？
 - －数値による効果測定は可能か？測定の意味があるのか？

【総合討論】

成功と失敗の評価基準と評価システム

中嶋:芸術祭の「成功」例または「失敗」例の中で何か共通点はあるのか。

住吉:失敗とか成功とかといった評価はしにくいですが、持続できなかったことを失敗としたら、茨城県北芸術祭の事例が考えられ、先鋭的なアートの理念が地域住民に通じなかったことに原因があると考えられる。

安部:そもそも、何を持って成功と失敗を評価するのか。

住吉:例えばマスメディアによる評価がある。あいちトリエンナーレの場合、私は観客として良い芸術祭だと思ったが、閉幕後、中日新聞紙面の記者による覆面座談会で一方的に批判された。

中嶋:確かに、一義的に成功と失敗の二項対立で考えるのは良くない。ただ、小規模でも持続的に開催されることをめざすのか、芸術祭として外部からの評価を重視するのか、それとも地域住民のつながりやコミュニケーションが生まれることを主目的とするのか、など、評価の視点や立場がいろいろあり、それらが相矛盾することもあるため、議論する際にある程度、評価の基準に当たるものを決めておく必要がある。

松岡:学術界で研究の評価は研究者同士で peer review で行うが、芸術界ではアート作品をどう評価する

のか。

住吉:アート作品はキュレーター、評論家、ジャーナリストなどの専門家により評価されてきた。

松岡:専門家による評価、マーケットにおける評価、一般大衆による評価はそれぞれ違うことがあると思うが、評価が一致する事例はあるのか。

住吉:例えば、ヴェネチア・ビエンナーレのような国際美術展は、評価サイクルがすでに形成されている。つまり、キュレーターがアーティストの理念に賛同し、そのアーティストの作品を評価する。それから、キュレーターの評価に伴い作品の市場価値が上がり、一般の人々もその作品を認めるようになる。

松岡:そのような評価サイクルが形成されたのは、ヴェネチア・ビエンナーレが世界でブランドになっていることが原因であろう。マスメディアや社会がそのブランドを認め、そこに出演するアーティストや作品に対して評価が高くなると考えられる。

住吉:ヴェネチア・ビエンナーレに出演しても必ずしも高く評価されるとは限らないが、そこでの出演経験は確かにアーティストのキャリアにとって非常に重要である。

ディレクターの決め方

森野・藤城:ディレクターの決め方は、どのように行われるのか。

住吉:普通は有識者からなる委員会によって決まる。もちろん、芸術祭の方針や開催地の地域性によって、人選する基準がそれぞれ異なる。

芸術祭の市場価値

安部:瀬戸内国際芸術祭の場合、予算的に福武財団からの支援が大きく、インフラ上でも美術館などの主となる施設は、ほとんど福武財団により建てられたものである。

住吉:芸術祭だけではやはり物足りず、常設作品や、地中美術館や島キッチンのような恒久的な施設を整備したほうが人々を惹きつける。

安部:その消費者を惹きつける魅力は、いわゆる市場価値だと思う。市場価値を備えていない芸術祭はあるか。

住吉:支援者が企業ではない芸術祭もあるが、いずれにせよ、有力なスポンサーがないと芸術祭の持続が困難になる。

松岡:芸術祭の持続には安定的な政治環境も必要であると考える。

浜通り地域における芸術祭の可能性

松岡:福島浜通り地域における芸術祭などの文化事業を考える際、日本国内の先行事例の中に参考になれるものはあるか。

佐々木:今回の地域は都市型とも地域型とも異なる。住吉さんが紹介していただいた事例の中では、都

市の郊外で開催するさいたま・トリエンナーレに近いのではないかと。また、現在の浜通り地域ではそれぞれの自治体が少しずつ動いてはいるが、大きなインパクトを生み出すためには、やはり浜通り地域が一体となるためのビジョン（目指すべき未来）が必要である。

安部:先ほど報告の中で特殊型の芸術祭は、時間の関係で詳しく説明されていなかったが、その中に参考価値のある事例はあるか。

住吉:BEPPU PROJECT は参考になれるかもしれない。BEPPU PROJECT の現代芸術フェスティバル混浴温泉世界は芸術祭というより、プログラムが充実したイベントである。特に、ギャラリーがアーティストと地元住民の間の橋渡し役となり、地元の人々にアーティストの思いを理解してもらうのに大きな役割を果たした。

永井:別府市は観光地の性格が強いのが、BEPPU PROJECT の 1 つの大きな特徴であると考え。つまり、BEPPU PROJECT は特定の問題意識がなく、観光のために芸術祭を行ったのである。しかし、福島の浜通り地域では 1F やエネルギー産業遺産群を核とした芸術祭を構想する際に当該地域に存在する問題、あるいは外部に発信したいテーマを先行して明確にしなければならない。この点が福島浜通り地域と他の地域が異なるところだと思う。

安部:震災直後に福島をテーマに作品を創作するアーティストがたくさんいたが、継続的に福島をテーマに作品を作り続けるアーティストは限定されてきている気がする。

住吉:災害というテーマに対し、地元の人々も気持ちが複雑であると考え。気仙沼市では、震災後、市街地に残った津波による遺構の処理について、会議を開いたことがある。地元には保存派もいれば、撤去派もいた。外部の有識者たちは災害の記憶を風化させないため、保存すべきだと主張したが、結局地元住民の感情に配慮し、遺構が撤去されることになった。

藤城:震災への関心は確かに風化しているが、それにかかわらず、廃炉などの現実問題が依然として存在している。また、浜通り地域ならでのテーマを考えると同時に、住民感情にも配慮する必要があるが、なかなか難しい。

安部:例えば、産廃問題で苦しんでいた豊島は、1990 年代より 20 年経った 2010 年に瀬戸内国際芸術祭の開催を迎えた。この観点から考えると、福島も芸術祭などのことを考え始める前に必要な時間があるべきであるという意見もある。

永井:実際に、初回の瀬戸内国際芸術祭で豊島会場は、あまり産廃問題に触れなかった。しかも、死生観に関わる作品が多かったため、住民からの反発もあった。産廃問題は、やはり現場に行って歴史を学ぶことが一般的であるが、アートと産廃問題の繋げ方はまだ結論が出ていない。

安部:豊島では、芸術祭の前から島の学校という地域プラットフォームの取り組みが行われてきており、産廃問題の他に、地域の新たな魅力を見出し、外部に発信することも住民で議論されていた。その議論が何年も続いた文脈の中で、豊島が瀬戸内国際芸術祭を受け入れることになったと感じる。

住吉:豊島には、豊島美術館やクリスチャン・ボルタンスキーの『心臓音のアーカイブ』など、死生観にまつわる作品が多い。それはアーティストたちが豊島での創作の過程で、土地にまつわる負の歴史を知

り、何かを感じているから、そのような作品を創作したのであろう。ただし、生と死の問題は現代芸術全般において重要かつ普遍的テーマといえる。

安部: 多分、キュレーターが意識して選別していると思う。浜通り地域でもキュレーションができる人材が必要になる。

アートの役割

松岡: 必ずしも何年おきかの芸術祭の形式にとらわれる必要はない。多くの可能性を考えたら良い。

安部: 「文化育成と発信」という名称のように、事業の持続性を重視する。持続的な文化事業の推進により、地域コミュニティに変化をもたらしたい。

松岡: 芸術祭そのものの持続にこだわる必要はないと考える。浜通り地域では、自治体内でも、自治体間でも、複雑な問題を抱えている。そのような地域だからこそ、アートに住民間の分断を超え、対立を癒す力を発揮してほしい。

佐々木: 浜通り地域の在り方は、基本的に国が決めていて、住民は受け身的にその状況に巻き込まれている。そこで大切なのは、住民が自分の足で立ち上がって進むこと、地域が再生していくためには住民の自律的に行動するという意識の醸成が非常に重要である。そういう意味で、自律的に行動する地域の雰囲気を出することもアートの持つ力だと思う。

安部: ふくしま広野 RC はふくしま学（楽）会という世代・分野・地域を超えた議論の場を設定し、未来学園の高校生を含め定期的に議論を行っている。その場にアーティストも参加し、未来の主人公になる高校生たちとアートや文化について、いろいろディスカッションすることがおもしろいかもしれない。

住吉: アートと未来を担う世代とのつながりは1つのテーマとなり得るのではないか。福島空港で子どものためのダンスワークショップを主催したことがある。ダンスを通じ、子供たちにアートの魅力を伝えた。また、自身でプロデュースしているアートプロジェクト「ダンス保育園！！」では、子育て中のアーティストと観客のために、アートの創作と鑑賞の機会を創出することにより子育て世代を応援している。

藤城: 芸術祭が広野中心に行われることに違和感がある。浜通り地域で分断が起きないような地域連携を考える必要がある。

松岡: ふくしま広野リサーチセンターは芸術祭を含めた SI 構想は、広域的・長期的観点から浜通り地域全体の復興を考えている。この文化育成と発信事業も広野町だけにとどまらず、広域的な展開を考えるものであり、誰が、いつ、何を、どこで、どのようにやっていくのかは、福島の皆さんとも良く相談しながら進めたい。

安部: 次回の WG 会合は7月下旬か秋頃に開催することを予定する。本日の会合を踏まえ、第4回ふくしま学（楽）会に向けて、広域な観点から浜通り地域における文化事業について議論を続けていきたい。

以上

（最終作成：2019年6月28日）